革新者、新たな戦い

アストレア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
革新者、新たな戦い

【Ｎコード】
Ｎ６１１０Ｉ

【作者名】
アストレア

【あらすじ】
刹那がなのはの世界にトリップするクロスオーバー小説。
はっきり言う、この小説は作者の妄想を文章化した物語です。
それでも許せる人は御入りください。

設定（前書き）

この小説の設定です。

刹那が最強です。

初めて小説を書きます。誤字や、漢字の間違え、アドバイス等は、感想板にお願いします。

設定

ＯＯの世界

イノベイドとの戦い後、地球連邦は平和のために動き出す。

ソレスタルビーングは、今の世界に必要無い存在になる。

外宇宙の散策が始まるのはイノベイド戦後？年後。

ソレスタルビーングは刹那に外宇宙散策用の船等の開発後解散している。

劇場版とは繋がらない。

なのはの世界

機動六課設立よりしばらくたっている。初出動より前。

刹那・Ｆ・セイエイの設定

イノベイドとの戦いの後一年が過ぎ、外宇宙の散策に出る。地球圏へ帰還を始めた時、次元の揺らぎの影響により、ミッドチルダにたどり着く。

刹那が持っていたガンダムは、全て一つのデバイスになる。

ＯＯの世界からの参戦
刹那・Ｆ・セイエイ

ＯＯの主人公にしてこの小説の主人公。
ひょんなことからミットチルダにたどり着く。

アリー・アル・サーチェス

ＯＯの世界の最凶の男、この小説では、ライルに撃ち殺された訳ではなく、アルケー爆発のさいになのはの世界に行く。現在は、スカリエッティに着いている。

ＭＳ（なのはの世界ではデバイスとして機能する）

ＯＯガンダム
ＯＯライザー
ＯＯザンライザー
ＯＯセブンソード
刹那がイノベイド戦に使用したＭＳ。
この小説では、刹那専用デバイス、Ｏ（オー）からどの姿にもなることができる。
なおＯＯザンライザー、ＯＯセブンソードはＭＳＶの機体のためアニメ本編は未登場

アルケーガンダム
サーチェス専用にスローネツヴァイを改良した機体
この小説では、サーチェスがスカリエッティにＧＮドライブτとスローネのデータ（なのはの世界に来たさいにアルケーのコンピュータがついてきたその中にデータがあった）を渡す替わりにアルケー

を作り、自分も戦いに参加させてもらった

スローネアイン
スローネツヴァイ
スローネドライ
チームトリニティが使用したガンダム
この小説ではスカリエッティが生産しガジェットと共に戦う（スカリエッティ生スローネはオリジナルより機体性能は下、替わりに稼動時間が延びている。）

オリジナルＭＳ、デバイス
Ｏ
刹那専用デバイス。
ミットチルダにたどり着いた頃はアストレアのみだが、物語が進むにつれて、エクシア、ＯＯが使えるようになる。
武器や強化装備を呼び出すことができる。

ガンダムアストレアＦ３
アストレアＦ２の改良機、最新技術を使っている。見た目はアストレアＦ２とはほぼ変化無い、しかし、ＧＮドライブをコーンタイプに変更、ＧＮコンデンサを最新の物に変え、ＧＮリフレクションを強化したＧＮリフレクターを装備。
ＧＮリフレクター
アストレアＦ３に装備された防御兵器、手から発生する特殊フィールドにより、一定威力のビーム射撃を跳ね返すことができる。跳ね返せなくても、ビーム射撃を無力化できる。ＧＮリフレクションとは違い、トランザムをしなくても発動可能。ただし、粒子の消費が激しい。
武装

ＧＮビームライフル
ＧＮビームサーベル×２
ＧＮビームバルカン×２
ＧＮシールド
ＧＮソード
ＧＮプロトソード
ＧＮロングブレイド
ＧＮショートブレイド
ＧＮキャノン
ＧＮリフレクター

アヴァランチェアストレアＦ３
アストレアＦ３にアヴァランチェユニットを装備した姿。
アヴァランチェユニットは、元はエクシア用の装備だが、肩に取り付けるパーツを改造、アストレアにも装備可能にした。
武装はエクシアのセブンソードを装備。

ブレイカーアストレアＦ３
アストレアＦ３専用の装備。
高い射撃能力と防御能力を持つ装備。
刹那は本来は高速機動で接近戦を仕掛けるタイプだが、いざというときのために開発された。
姿は腕のＧＮコンデンサを大型ＧＮコンデンサに変更、さらに、動力ケーブルにより、バックパックに繋がり、ＧＮドライブから直接粒子を供給可能になってる。脚にＧＮフィールドの発生装置を装備。
腰にミサイルポットか、ＧＮキャノンを装備するバックパックには、ＧＮバズーカ?をマウントできる。
装備
ＧＮバズーカ?×２
ＧＮビームサーベル×２

ＧＮビームライフル
ＧＮフィールド
ＧＮリフレクター
キャノン装備時
ＧＮキャノン×２
ミサイルポット装備時
ＧＮミサイル×２４

ガンダムエクシアＲ３
ガンダムエクシアＲ２の改良機。
エクシアのセブンソードを使用できるように改良、ブースターも増やしたため、機体性能が上昇している。
装備
ＧＮソード改
ＧＮロングブレイド
ＧＮショートブレイド
ＧＮビームサーベル×２
ＧＮビームダガー×２
ＧＮシールド
ＧＮプロトソード

フルブースターガンダムエクシアＲ３
フルブースターユニットを装備したエクシアＲ３
両肩、両脚、胸にブースターを装備した姿。
両肩のブースターは３６０。動ため小回りがきく。
最大速度はアヴァランチェユニットより劣るが、最大加速はアヴァランチェユニットより上。
装備
ＧＮソード改
ＧＮロングブレイド

ＧＮショートブレイド
ＧＮビームサーベル×２
ＧＮビームダガー×２
ＧＮシールド
ＧＮプロトソード

ザンＯＯライザーＧＮＨＷ／Ｓ
ザンＯＯライザーとＯＯセブンソードの力を一つにした機体、早くいえばＯＯセブンソードにザンライザーを装備した機体。合計１１の剣を装備しているためにスピードがやや落ちている。トランザムも可能。
装備
ＧＮバスターソード？
ＧＮカタール×２
ＧＮロングブレイド？
ＧＮショートブレイド？
ＧＮソード？×２
ＧＮビームサーベル×２
ＧＮバスターソード？

ＯＯライザーセブンソード

ＯＯライザーに、ＧＮカタールを装備した機体、この小説では、ＧＮソード？がＯＯの復活してもしばらく修復のためにでないため、剣が六本で戦う。

装備
ＧＮソード？
ＧＮソード？×２
ＧＮカタール×２

ＧＮビームサーベル×２
ＧＮミサイル×１０
ＧＮビームマシンガン×２

プロローグ

俺は走り続けている。

ただひたすらに、宇宙の果てを目指し。

ただ一人、ガンダムと共に、宇宙(ソラ)を飛ぶ。

俺達の行いにより、世界は変わった。

人々は、自らの意思で明日を掴むだろう。

ならば

俺達、ソレスタルビーングは必要無い。

そして。

俺は、イノベイターとして、ガンダムと共に、未知なる異種を見つけるために。

刹那「地球圏外航行開始より、一ヶ月が過ぎたか、食料のこともある、そろそろ地球圏に戻り始めるか。
赤ハロ、進路変更、地球圏への帰還を開始する。」

ハロ「了解、了解」

俺は宇宙の果てから、地球を目指し始めた。
地球の位置が、宇宙の果てで解るのはちょっとした仕掛けがあるからだ。
その鍵がＧＮドライブにある。
ヴェーダとＧＮドライブはつねに繋がっている。この性質を利用して、ＧＮドライブからヴェーダの位置を知ることができるシステムを搭載した。
そのため、宇宙のどこからでも、地球の位置を知ることができる。

そして、ＧＮコンテナ２。
外宇宙探索のために開発された小型戦艦。
初代プトレマイオスに装備されたＧＮコンテナを改良、モビルスーツ（以下よりＭＳ）三機と空間戦闘機二機、ＧＮアームズ一機を格納可能。さらにＧＮキャノン×２、ＧＮミサイル×１０装備する。
通常航行なら一人でできる小型戦艦、現在、この船にはＯＯガンダ

ム、ガンダムエクシアＲ３、ガンダムアストレアＦ３の三機とＯライザー、ザンライザーの二機、ＧＮアームズＥ一機と、各ガンダムの装備と強化装備を積んでいる。

刹那「ガンダムの整備をする、赤ハロ、操縦を頼む」

ハロ「待った、待った」

刹那「どうした？」

ハロ「前方に高エネルギーを感知」

刹那「なに？！」

俺がそう言った瞬間、俺達は光に包まれた。

STORY01出会い

時空管理局「機動六課」部隊長室

なのは「失礼します。どうしたの？はやてちゃん」

フェイト「緊急の呼び出しみたいだけど。何かあったの？」

六課部隊長室になのはとフェイトが入って来る。

はやて「ごめんな二人共、さっき次元転移反応があったんや、ガジェットの反応もその近くにある、次元漂流者なら保護を、スカリエッティの関係者なら逮捕をお願いするで」

なのは「了解、それではやてちゃん、ポイントは？」

なのはがきくと

はやて「ここや」

はやてがポイントを表示する。

フェイト「クラナガンの郊外、わかったすぐに出動しようなのは、はやて行ってくるね。」

なのは「行ってきます、はやてちゃん。」

はやて「気をつけてな二人共。」

二人は部隊長室を出、出動した。

クラナガン郊外
白い光の中から、一人の少年が出て来る。
刹那「ここは？重力がある、地球なのか？それにガンダムはどこだ？」

光の中から出て来た刹那は当たりを見回しながら言う。
？「マスター、私はここです、少し落ち着いて下さい。」

刹那の胸元から声が聞こえた。刹那は胸元のペンダントを取り出す。

刹那「おまえは？」

？「マスターのガンダムがこの世界に対応した姿になった物です。私のことはOと呼んで下さい。」
刹那「O、それがおまえの名前か、それにおまえの話から推測すると、ここは地球では無いのか？」

O「はい、ここはあなたがいた地球とは違う世界、言うならば平行世界です。」

刹那「平行…世界。」

Ｏ「はい、ここは化学と魔法が人々を守る世界です」

刹那「魔法…そんな物があるのか。
ガンダムは使えるのか？」

少し驚き、１番重要なことを聞く。

Ｏ「はい、ただし現在は世界の移動の影響でＯＯとエクシア、それと強化装備が使えません。」

刹那「アストレアしか使えないのか」

Ｏ「はい、セットアップすればマスターがガンダムに……いえ、実際に使ったほうが良いでしょう、敵が来ます。」

刹那「なに！数は？」

Ｏ「前方より六機、マスター、セットアップを」

刹那「わかった、Ｏ、アストレアホーム、セットアップ！」

刹那が叫び、光が刹那を包む。光が消えると、真紅の機体が現れる。
右にＧＮビームライフルを、左にＧＮシールドを装備したアストレアＦ３がそこにいた。

刹那「俺がガンダムになったのか、ＧＮドライブは問題無いようだな。」
少し興奮気味の刹那に、Ｏが警告をする。

Ｏ「マスター、来ます！」

Ｏがそう言うと円いカプセルのような機体が現れる。

Ａ刹那「ガンダムアストレアＦ３、刹那・Ｆ・セイエイ、出る！」

アストレアがガジェットにむけて、加速する、ガジェットがビームを発射する。

Ａ刹那「！あれはビーム兵器か」

アストレアはビームを回避しながらガジェットに近付く。

Ｏ「はい、ＧＮリフレクターで跳ね返せますよ、魔法も跳ね返せます。」

Ａ刹那「わかった」

アストレアがガジェットに近付く。

Ａ刹那「Ｏ！ＧＮソードを！」

Ｏ「ラジャー」

アストレアのＧＮビームライフルが消え、ＧＮソードが現れる。

Ａ刹那「はぁぁぁぁ」

気合いと共に一機目のガジェットを切る。

ガジェットがビームを発射する。

A刹那「GNリフレクター！」

アストレアの手から特殊フィールドが発生し、ガジェットのビームを跳ね返す。

跳ね返ったビームが二機のガジェットを貫く。

A刹那「これで終わりにする。」

アストレアはGNキャノンを装備する。

A刹那「高濃度圧縮粒子、開放！」

アストレアがトリガーを引く、その瞬間、ピンク色の閃光が走る、そして光に包まれた三機のガジェットは、分子レベルで消滅した。

A刹那「戦闘終了」

GNキャノンを外し、刹那は少し力を抜く。

O「魔力反応接近！」

なのは&フェイトSIDE

なのは「ポイントはこのあたりだけど」

なのはが辺りを見回す。
フェイト「なのは！あれ」
フェイトがなのはを呼ぶ。
なのは「なにかあった？フェイトちゃん」
なのはがフェイトに近付く。
フェイト「なのは、あれ」
なのは「！」
フェイトの指差す先に、赤い人型の機械がガジェットを破壊していた。
なのは「なに…あれ」
？「これで終わりにする。」
赤い機械は大型のキャノン砲を装備する。
？「高濃度圧縮粒子、開放！」
赤い機械のキャノン砲から、ピンク色の閃光が放たれる。
なのは「なんて火力なの」

なのはは驚く。

フェイト「なのは！」

なのは「う、うん行かなと。」

二人は赤い機械に向かって飛びたった。

ＳＩＤＥＯＵＴ

刹那「なに！」

Ｏ「魔力反応来ます。」

刹那がＧＮビームサーベルを抜き、身構える。

刹那「来たか！」

刹那の前に黒い服に身を包んだ女性と、白い服に身を包んだ女性が現れる。

なのは「時空管理局です。」

刹那「時空管理局？この世界の警察組織か？」

フェイト「はい、あなたを保護しに来ました。」

刹那「そうか、ならば武器を構える必要はないな。」

刹那ＧＮビームサーベルをしまう。

刹那「Ｏ、元に戻してくれ。」

Ｏ「ラジャー」

アストレアの装甲が消え、私服に身を包んだ刹那が現れる。

フェイト「人だったんだ、えっと時空管理局、遺失物管理部起動六課所属、フェイト・Ｔ・ハラオウンです。」

フェイトが自己紹介をし、

なのは「同じく高町なのはです。」

続いてなのはが自己紹介をする。

刹那「元ソレスタルビーング所属刹那・Ｆ・セイエイだ」

そして刹那も自己紹介をする。

なのは「では刹那さん、お聞きしたい事があります、私達に着いて来て下さい。」

刹那「了解した。俺もここのことを聞きたいからな。」

今

一人の魔法少女と

人々を導く革新者の

道が交わった

この出会いは

物語の序曲に過ぎない。

ＳＴＯＲＹ０１出会い（後書き）

ども管理人のアストレアです。

この小説を読んで下さったみなさん、ありがとうございます、駄文ですがこれからよろしくお願いします。

次回予告

刹那と起動六課の出会い。

新たな仲間に話す、自身の戦い。

そして、新たな戦いに刹那は身を投じる。

次回

起動六課

刹那、起動六課の新たな仲間になる。

ＳＴＯＲＹ０２機動六課

機動六課部隊長室

なのは「はやてちゃん、次元漂流者一名の保護、完了したよ。」

はやて「お疲れ様や、それでその人が？」

なのは「うん、刹那さん、この人が機動六課の部隊長の。」

はやて「八神はやてやよろしく。」

刹那「刹那・Ｆ・セイエイだ」

刹那は自己紹介をする。

余談だが、刹那は今、私服に一対の翼の形をしたペンダント、Ｏを首に下げてる。

はやて「さっそくですが、あなたの今の状況は」

はやてが話し始めるが

刹那「ある程度はこいつから聞いている。」

と、刹那は胸に下げてるＯをてにとる。

Ｏ「どうも」

三人「しゃ…しゃべった！？」

刹那「驚く事なのか？」

刹那は不思議そうに聞く。

なのは「インテリジェンスデバイスなの？」

なのははOに聞く。

O「はい」

はやて「聞いているてどうゆうことや？」

刹那「この世界が、俺の住んでいた地球と違う、平行世界らしい。」

はやてはそのことに驚く。

はやて「ほんまか？」

刹那「ああ俺の住んでいた世界には、魔法は存在していない。」

はやて「差し支え無ければ刹那さんの世界について教えてくれませんか？」

刹那「了解した」

刹那は自分の世界について話した、起動エレベーター、MS、ソレスタルビーング、大まかだが、重要なところは話した。

刹那の話しに三人は驚いた。
なのは「刹那さんは、元ソレスタルビーングだ、と言いましたよね。
」
刹那「ああ」
なのは「じゃあ、人を殺した事が。」
刹那「ああ、ある、もう何人もの命を奪ってきた」
フェイト「どうして……」
刹那「悪いが話せない。」
はやて「どうしてや」
はやては睨み、怒りをこめ、そう言った。
刹那「組織の行動は、機密になっている。仲間を裏切りたくは無い。
」
刹那は目を閉じ、話す。
そして。
刹那「罰ならば受ける、俺達の行いは、しょせんテロ行為に過ぎない。おまえ達が、俺に裁きを降すならば、俺はそれを受けよう。」
目を開き、迷い無く言った。

沈黙が続いた中、はやてが刹那に告げる。
はやて「罪を償う覚悟が、あるんやな。」
刹那「ああ」
はやて「そうか……なのはちゃん、フェイトちゃん、刹那さんは強いんか？」
なのは「え…あ、うん、すごく強かったよ。」
なのはが戸惑いながら答える。
はやて「そうか……なら、刹那さん、あなたには機動六課の民間協力者として、私達に力を貸して欲しい。もし、過去の罪を償う気があるなら、私達とミッドチルダの人々を守って欲しい。」
とはやては告げた。
刹那は少し驚き、そして。
刹那「了解した、俺の力、好きに使ってくれ。」
と彼女達に告げる。
はやて「そうか、なら改めて、時空管理局機動六課部隊長、八神はやてや、うちのことは呼びやすい呼び方でかまわんよ」
フェイト「同じく、機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・T・

ハラオンです。私もはやてと同じで、呼びやすい呼び方でいいよ」
なのは「同じく、機動六課スターズ分隊隊長、高町なのはです。私も呼びやすい呼び方で。」
刹那「ああ、よろしく頼む、なのは、フェイト、はやて。」
刹那とはやてが握手を交わす。
はやて「さて、じゃあ刹那さんの…」
刹那「刹那でいい」
はやてが話始めたとこを刹那が割り込む。
刹那「これは共に戦う仲間だ、自然に呼んで欲しい。」
はやて「了解や、ほんなら刹那君が入る分隊を決めなあかんな。」
フェイト「そうだね、たしかにその方が動きやすいし。」
フェイトが頷く。
はやて「なら、刹那君の戦闘データを見して貰おうかな。」
はやてが言うと、なのははレイジングハートを操作し、ガジェットとの戦闘画像を出す。
なのは「パワーもスピードも文句なし、即戦力だよ」

なのははそう言うとはやてに画像を見せる。

はやて「フェイトちゃん並のスピードになのはちゃん並の火力、すさまじいな。」

刹那「だが、俺は射撃より白兵戦の方が得意だ。」

割り込むように刹那が言う。

はやて「そうなんか？」

刹那「ああ、射撃の精度が上がったのは三年程前だ。」

はやて「そんならスターズの方がええな、刹那君はスターズの０５として、行動して貰うで」

刹那「了解した、なのは、これからよろしく頼む。」

なのは「うん、よろしくね！刹那君。」

二人が握手を交わす。なのはの頬が、少し赤くなっていたことに気がついたのは、はやてだけだった。

そんな中ノックの音がし、二人の女性が入って来る。

シグナム「主はやて、御呼びでしょうか？」

はやて「ちょうどええとこに来たな、こちら六課の民間協力者になってくれた、刹那・Ｆ・セイエイ君や、分隊はスターズやからよろしくなヴィータ。」

ヴィータ「了解、スターズ分隊副隊長、ヴィータだよろしく頼むセイエイ」

ヴィータが自己紹介をする。

はやて「それとシグナム、明日なんやけど、刹那君の実力を計るために模擬戦の相手を頼むで。」

と、はやてが言うと

フェイト「はやて！私も刹那と模擬戦したい！」

バトルマニアが現れた。

はやて「フェイトちゃん、気持ちはわかるが同じ剣士どうしでやった方が実力が解りやすいんよ」

理由を説明すると、フェイトは渋々引き下がった。

シグナム「残念だったなテスタロッサ。ライトニングの副隊長、シグナムだよろしく。明日の模擬戦はいい戦いをしよう。」

刹那「ああ、よろしく頼む。」

はやて「さてと、じゃあなのはちゃん、刹那君を空いてる部屋に案内してや、もう遅い時間やし、ゆっくり休んで、明日に備えてな。明日は１０時に訓練場で模擬戦やるから。なのはちゃん、フォワード陣の訓練はそれまでに終わらせてな。施設の案内は私がやっとくから。」

はやてが明日の予定を簡単に話す。

なのは「了解、刹那君は大丈夫？」

刹那「問題ない」

はやて「なら解散や、シグナムとヴィータは残ってな、刹那君のこと話しとくから。」

二人「了解」

なのは「じゃあはやてちゃん、また明日ね、失礼しました。」

刹那「失礼した。」

二人は部隊長室を後にした。

刹那の部屋に向かうまでの間、二人は明日のことを話していた。

部屋に着くと。

なのは「じゃあ刹那君、また明日ね。」

と、立ち去るなのはに刹那が呼び止める。

刹那「なのは」

なのは「なに？刹那君。」

刹那「これからよろしく頼む。」

少しだけ笑いそう言った。

なのは「へ／／あ…うん……よろしくね／／…じゃ…じゃあまた明日。」

と、顔を赤くして、なのはは立ち去った。

刹那はその後、眠りにつき。なのはは

なのは（どうしよう、私顔がすごい赤くよ～。刹那君の顔、かっこよかったし……あぁぁ落ち着け私！）

かなりテンパってた。

ＳＴＯＲＹ０２機動六課（後書き）

どうもアストレアです。

駄文ですね…自分でも？なとこありますし、すいません自分文章力のなさです。とりあえず次回予告をどうぞ

ぶつかり合う剣と剣。

二人の剣士の誇りを賭けた戦いが。

今始まる。

次回　　刹那ＶＳシグナム

刹那、炎魔剣と対峙する。

ＳＴＯＲＹ０３刹那ＶＳシグナム（前書き）

やっと更新できた。
みなさん、お待たせしました。いや～ストーリーは思い浮かぶんですが、書く時間がない！はい言い訳です。
作者、今学校のテストのために、次回の更新も遅目です。ごめんなさい。もしかしたら年内に後一話位しか更新できないかもしれませんが、今後ともよろしくお願いします。

ＳＴＯＲＹ０３刹那ＶＳシグナム

翌日
六課食堂
現在時刻０９：００
訓練場ではフォワード陣が、なのはに扱かれているもよう。
はやてから機動六課の施設説明を受けている刹那は、はやてと共に、朝食を取りに来た。

はやて「ここが食堂や、時間も時間やし、朝ごはん食べようか。」

刹那「ああ」

二人が席に着く、と同時にはやてが話し始める。

はやて「とりあえず次で最後、訓練場や。ここの訓練場はすごいで」

自慢げに話すはやて。

刹那「そうなのか？」

はやて「まぁ見てからのお楽しみということで。
て、刹那君ご飯の量少ないな。」

刹那が食べているのは、ホットドックとサラダ。普通の人より少な

めだ。

刹那「戦う前だからだ」

はやて「なるほどな」

こんな感じで二人は雑談しながら朝食を食べた。

予断だが、リインを見た刹那がかなり驚いていた。

朝食を終えた二人は、訓練場を訪れた。

刹那「廃墟を訓練場にしてるのか？」

はやて「違うで。これは簡単に言えば、実体を持った立体画像みたいなものや。」

一通りの説明をし、二人は訓練の様子を見る。

しかし刹那は暗い。

はやて「刹那君？どうしたん？そんな暗い顔して。」

刹那「フォワード陣の年齢が、若すぎないか？」

はやて「ああそのことか」

はやては納得と言う顔をする。

はやて「四人共自分の意思や目的があって、ここにいるんや、詳しいことは個人個人に聞くとええよ。」

刹那「そうか」

はやて「お！訓練終わった見たいやな。」

なのはが刹那達の方へ来る。

なのは「刹那君、はやてちゃん、おはよう。」

なのはが笑顔で挨拶してくる。

はやて「おはようさんなのはちゃん。」

刹那「おはようなのは」

二人も続いて挨拶をする。

フォワード陣も訓練場から上がって来る。

ティアナ「あ八神部隊長、おはようございます。」

はやて「おはようさん、四人共がんばってるな～」

フォワード陣「「「「はい！」」」」

スバル「八神部隊長」

スバルが手を挙げる。

はやて「なんや、スバル？」

スバル「あのぉその方は？」

スバルが刹那に目をやる。

はやて「ああ紹介しないとあかんな。機動六課の民間協力者になってくれた。」

刹那「刹那・F・セイエイだよろしく頼む。」

はやて「分隊はスターズに所属させるから、スバル、ティアナ、仲良くしてな。」

ティアナ「は、はい！ティアナ・ランスター二等陸士です。」

スバル「スバル・ナカジマ二等陸士です！よろしくお願いします！」

エリオ「エリオ・モンディアル三等陸士です。お願いします！」

キャロ「キ、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です…。

この子はフリードリヒといいます。」

フリード「きゃる。」

フォワード陣が自己紹介をする。

そして、キャロの自己紹介が終わったところで、シグナムが来た。

シグナム「早いなセイエイ、もういたのか。」

刹那「ああ、では始めるか。」

シグナムが来たので、二人は訓練場に入って行く。
模擬戦が始まるまでに、はやてとなのはが刹那のことを話していた、
ちなみにフェイトも、模擬戦開始の少し前に来た。

訓練場

刹那「O、今回は最初からGNソードを使う。」

O「了解です。」

なのは「二人共、問題ない？」

なのはの声が聞こえる。

刹那「問題ない」

シグナム「こちらもだ」

なのは「それじゃあ行くよ！
レディースタート！」

刹那「O、アストレアを」

O「了解です。」

刹那が光に包まれ、アストレアが現れる。
それを見たフォワード陣は、ティアナを除き、大興奮。一方、なの

は達は、先程合流した、シャーリーとリインと、刹那の戦闘データをとっている。（書かれて無いがヴィーダもいます。）
一方、刹那とシグナムは、アストレアを装備した瞬間、一気に間合いを積めた刹那が、攻撃を仕掛ける。

A刹那「はぁぁぁぁぁあ」

しかし、シグナムはそれをレヴァンティで受け止める。
だが、刹那も甘くはない、そこから二回、三回と剣が交わる。

シグナム「やるな！セイエイ！」

シグナムが一度距離を置く。

シグナム「だが、これが防げるか？」

レヴァンティからカートリッジが吐き出される。

シグナム「紫電一閃！」

刹那は迫り来る火炎剣を、GNシールドで防ぐ。

A刹那「ぐ……」

やや押され気味の刹那だが。

A刹那「うおぉぉぉぉ」

気合いと共に、GNドライブの出力を上げ、押し返す。

シグナム「なに！？」

圧し負けたシグナムは、再び距離を置く。

シグナム「やるな、紫電一閃を押し返すとは。だがその盾は限界のようだな。」

シグナムの言うとうり、ＧＮシールドには大きな亀裂が走り、盾としての機能がほとんど使えない状態だった。

Ａ刹那「Ｏ、ＧＮシールド廃除、代わりにＧＮプロトソードを。」

Ｏ「了解」

アストレアからＧＮシールドが外され、代わりにＧＮプロトソードが装備される。

シグナム「なるほど、二刀流か。」

Ａ刹那「行くぞ！」

刹那とシグナムは再び剣を交わす。シグナムは鞘とレヴァンティ本体で、刹那は二種のＧＮソードで攻撃と防御を繰り返す。

Ａ刹那「は！」

刹那の一撃でシグナムが吹っ飛ぶ。そして刹那が距離を詰め。

Ａ刹那「はぁぁぁぁ！」

一撃を放つが。

A刹那「なに！」

プロテクションで防がれる。

シグナム「私に防御魔法を使わせるとはな」

A刹那「はあぁぁぁぁ」

しかし、刹那はプロテクションを切ろうと剣を減り込ませる。

シグナム「なに！」

プロテクションに亀裂が走る、しかし刹那は、GNソードでは、突破が難しいと考え、新たな剣を手に取る。

A刹那「O、GNロングブレイドを！」

O「了解！」

GNプロトソードを畳み、GNロングブレイドを手に取った刹那は、GNソードを引き、亀裂にGNロングブレイドを叩き込む。

A刹那「うおぉぉぉぉ」

そして、プロテクション全体に亀裂が走り、プロテクションを破壊する。

A刹那「これで俺の勝ちだな」

刹那はＧＮソードをシグナムに向ける。

シグナム「ああ私の負けだ。」

こうして、刹那とシグナムの模擬戦が終わった。

ＳＴＯＲＹ０３刹那ＶＳシグナム（後書き）

戦闘描写は書く難しいです。アドバイスとかあったら教えて下さい。
感想をお待ちしてます。

飛び交う質問。

学園物お約束の質問攻めが

機動六課でも発生する

次回、模擬戦の後

刹那、質問攻めにあう？

今回の次回予告、もしかしたら偽予告になるかもしれないです。

ＳＴＯＲＹ０４模擬戦の後（前書き）

ごめんなさい、待たせたのに短いです。本当にごめんなさい。

年内にもう?話更新出来るかもしれません、しばらくお待ちを

ＳＴＯＲＹ０４模擬戦の後

模擬戦の後、二人はみんなの元に戻って来る。

ヴィータ「おまえ何物だよ、ジグナムのプロテクションを切っちまうなんて。」

刹那「何物か……」

空を見上げ、刹那は考える。

刹那「破壊者だな。俺は。」

革新者と言ってもよかったかもしれない。だがあえて刹那は、破壊者と答えた。

フェイト「破壊……者」

刹那「ああそうだ」

今までの自分を思い返せば、そう答えるのが妥当だった。

刹那「俺は戦うことしかできないからな。」

なのは「戦うことしかできない？」

刹那「ああ。」

沈黙が流れた。

その沈黙を破ったのはなのはだった。

なのは「刹那君、どうしてそんな表現で自分を現すの？」

悲しい顔で刹那を見るなのは、その問いに刹那は。

刹那「……すまない、今は答えられない。」

そう答えた

ヴィータ「おまえ！」

ヴィータが食いかかろうとするが。

はやて「やめなヴィータ」

はやてが止めた

ヴィータ「でも！」

はやて「いいから」

はやては刹那に向かい

はやて「一つ、聞きたいことがある。」

刹那「なんだ？」

はやて「刹那君の戦う理由や」

刹那は迷わず

刹那「俺は世界の歪みを倒す。それが俺の戦う理由、俺とガンダムが存在する理由だ」

はやて「それが刹那君の戦う理由なんやな」

はやては真っ直ぐ刹那を見る。

刹那「ああ」

はやて「わかった、刹那君、今は答えられない、ちゅうことはいつかは話してくれるんやな。」

刹那「ああ」

はやて「なら、このことは刹那君が話してくれるのをまとう、それでええな、みんな。」

全員の返事が返ってくる。

その後、質問（主にフォワード陳）が続き、刹那もそれに答えていくねであった。

こうして、刹那はめでたく、機動六課の一員になった。

ＳＴＯＲＹ０４模擬戦の後（後書き）

今回よくわからん内容だ、ごめんなさい。

感想やアドバイス、ありましたらカキコミお願いします。

それと、次回からＳｔｒｉｋｅｒＳ本編に入ります。その際に、文字の入力速度の向上のため

ロング→Ｒ

ショート→Ｓ

フォワード→ＦＷ

と表記します。ご理解お願いします。

次回予告

鳴り響くサイレン

現れるガシェットとレリック

今こそ出動せよ！起動六課！

次回　初出動前編

刹那ガシェットを殲滅する。

ＳＴＯＲＹ０５初出動（前書き）

あけましておめでとうございます！

少し遅れましたが更新しました～。

今回は初出動のリニアトレイン戦前編です。それではどうぞ！

STORY05初出動

その日、スバルたちはいつものようになのはと早朝訓練をしていた。

なのは「はい。整列！」

なのはの声にスバルたちはなのはの元に集まる。

なのは「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト一本。みんな頑張れる？」

FW「「「「はいっ！！」」」」

なのは「じゃ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハートッ！！」

なのははレイジングハートを構えると、魔力スフィアがなのはの周りに複数出現する。

なのは「私の攻撃を5分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう！！」

FW「「「「はいッ！！」」」」

勝利条件を聞いたティアナはボロボロの状態でなのはの攻撃を回避し続ける自信はあるかと聞くが、スバルもエリオも自信が無いと答える。その返事にティアナは何とかなのはに一撃を与えるていくことを選択した。

なのは「それじゃあ、レディ・・・ゴー！！！」

ティアナ「全員絶対回避ッ！二分以内に決めるわよっ！！」

三人「「「おうっ！！」」」

なのはから放たれたアクセルシューターが四人に向かって飛んでくる。ティアナは三人に指示を与えると全員四方に散開した。

そんなＦＷ陳の訓練を、自身のトレーニングを終えた刹那が見ていた。

刹那「俺達とは違う四人チームと言ったとこか。」

武力介入を始めた頃のガンダム四機での戦いは、ミッションプランに従い戦っていた。そのためＦＷ陳のような積極にコンビネーションをとることはなかった。

訓練が終わり、五人が上がって来た。

なのは「刹那君おはよう。」

ＦＷ陳「「「「おはようございます刹那さん」」」」

刹那「ああ、おはようみんな。」

なのは「訓練を見ていたの？」

刹那「まあな」

訓練を見ていたさいに、抱いた疑問を聞く。

刹那「スバルとティアナは、調子が悪いのか？途中から動きが悪かったが」

スバル「いえ、私達じゃなくて。」

ティアナ「デバイスが」

二人は自分のデバイスを刹那に見せる。

刹那「なるほど」

なのは「それで、ＦＷ陳のデバイスをシャーリーのところに取りに行こうかな、て。」

なのははＦＷ陳のほうを向き。

なのは「それじゃあ、シャワー浴びて、朝ごはんにしようか。その後、シャーリーのところでデバイスを受け取ろう。」

ＦＷ陳「「「「はい！」」」」

なのは「刹那君も朝ごはんまだだったら一緒に食べる？」

刹那は少し考え

刹那「そうだな、おまえ達もいいか？」

刹那はＦＷ陳に尋ねる。

エリオ「はい！全然大丈夫です！」

真っ先に答えたのはエリオだった。

スバル「私も大丈夫ですよ。」

ＦＷ陳も乗り気だった。

刹那「そうか、なら、一緒に食べるか」

六人は隊舎に戻った。途中で刹那は、はやてとフェイトが出かけていることを聞いた。

シャワー室でシャワーを浴びた刹那は、エリオとフリードと女性陳が上がるのを待っていた。

刹那「エリオ、少し聞いていいか。」

エリオ「なんですか？刹那さん。」

刹那「エリオ、おまえは何故ここ（機動六課）にいる」

エリオに刹那は質問する、刹那は過去の自分のような存在を生みだしたくはない、そのため、何故ここにいるのか、何故戦うのか。その答えが知りたかった。

エリオ「何故ここにいる……ですか」

刹那「ああ、おまえくらいの歳なら、学校に行っているだろう？」

エリオ「たしかに、刹那さんの言うとおりです。でも僕は、普通の人とは違うんです。フェイトさんに助けられ、フェイトさんに恩返しがしたくてここにいます。」

刹那は驚いた、１０歳の少年がここまで強い意思を持っているとは思ってもいなかった。

刹那「そうか、なら、その意思を忘れないようにするんだ。そうすれはおまえはもっと強くなる。」

刹那は少し笑いながら、そう言った。

エリオ「はい！それであの、刹那さんが手の空いている時でいいんですけど訓練をしてもらえますか？」

刹那「俺か？」

エリオ「はい」

刹那はエリオなりの考えがあるのだろうと思い。

刹那「問題ない、俺はほとんど訓練をしているからな。おまえのひまな時に来い。」

快く了承した。

エリオ「はい！ありがとうございます！」
なのは「刹那君、エリオお待たせ～」
自分達を呼ぶ声が聞こえた。
刹那「なのは達を上がったようだな。食事を取りに行こう。」
エリオ「はい！」

食事の後、ＦＷ陳のデバイスを取りに行った、しかしリニアトレインにガジェットが現れ、ＦＷ陳は新たなデバイスを試す暇なく初出動となった。

ヘリ中にて。

ヘリから下を覗くと、山岳丘陵地区に路線を引いている貨物列車がかなりのスピードで運行されており、その周りにはガジェット達が飛びまわりこちらに備えているのか守りを固めていた。
ヘリの中にはスバル達４人、なのは・フェイト・リイン、そして刹那が待機していた。
シグナム・ヴィータの副隊長陣は本部で待機である。
あまりゾロゾロ行っても、スバル達が緊張してしまうからというはやての心意気である。
そこへ、はやてが本部から通信を入れてくる。
はやて『ええか？今回の任務は、リニアレールに積まれているロス

トロギア「レリック」の確保とガジェットの撃破や。
後、解析によると、リニアレールは内部に侵入したガジェットがメインコンピューターを掌握しているみたいなんや。
スバル達は列車内部に侵入してレリックの確保、リインも一緒に行ってメインコンピューターを取り戻してや。
なのは隊長達三人は制空権の確保を頼むわ。』

なのは「うん、了解だよはやてちゃん。」

刹那「了解！」

初出動のためか、スバル達は緊張して体を固くしていた。
初陣なので無理ないだろう、なのはは明るい声で話しかける。

なのは「みんな、緊張しているのは分かるけど、度が過ぎると体が動かなくなっちゃうから少しリラックスしよ？
これまでの訓練、みんな頑張っていたんだからきっと上手くいくよ。」

そう言われる４人だが、まだ緊張が抜けきっていないようだ。

刹那「俺達が上にいる、心配することはない。それにおまえ達ならできる、俺はそう思う。」

ＦＷ陳「「「「はい！」」」」

刹那の励ましに、ＦＷ陳の緊張はほぐれたようだ。

ヴァイス「もうすぐ降下ポイントだ！最初に降りる奴は準備しときな！」

操縦席からこのヘリのパイロットである、ヴァイス・グランセニックが声を張り上げ、その言葉を受け最初に降りるスバルとティアナがスタンバイに入る。

スバル「スバル・ナカジマ！スターズ０３、行きま～す！」

ティアナ「ティアナ・ランスター！スターズ０４、ＧＯ！」

二人がおりた後、刹那はエリオとキャロに声をかける。

刹那「エリオ、キャロ、お互いのサポートを忘れるよ。」

エリオ「はい！わかりました」

キャロ「が…がんばります」

エリオ「エリオ・モンディアル、ライトニング０３、出ます！」

キャロ「き、キャロ・ル・ルシエ・・・ライトニング０４、行きます！」

エリオは勢いよく、キャロはためらいがちに降下していった。

四人を見送った後

刹那「俺達も行こう」

なのは「刹那君も初出動だけど、大丈夫？」

刹那「当然だ」

なのは「うんそれじゃあ…高町なのは！スターズ０１、出動！」

フェイト「フェイト・Ｔ・ハラオウン！ライトニング０１、行きます！」

刹那「刹那・Ｆ・セイエイ、ガンダムアストレア、目標に飛翔する！」

なのは、フェイトに続き、アストレアを装備した刹那が飛翔する。
その肩には二つのＧＮキャノンがあった。

Ａ刹那「なのは！フェイト！ＧＮキャノンの射線上から放れろ！」

二人「了解！」

なのはとフェイトが放れたのを確認した刹那は。

Ａ刹那「ＧＮ粒子チャージ完了、アストレア、目標を殲滅する。」

二つの砲門から、高出力のビームを発射する。
一撃でガジェットを大量に撃破した刹那は、アストレアの装備を、ビームライフルとシールドに変え。

なのは「刹那君！フェイトちゃん！一気に突入しよう。」

二人「了解！」

なのはとフェイトと共に、ガジェットに突っ込んで行く。

A刹那「はあぁぁぁぁあ」

ビームライフルを連射しながら、ガジェットの群れに突入するアストレア。

なのは「アクセルシューター、シュゥゥゥゥト」

フェイト「ハァァァァケンセイバァァァァア」

続くなのはとフェイトの攻撃が、ガジェットを直撃していく。
かなりのスピードでガジェットが減っていくだが。

なのは「これって…ガジェットの増援!?」

刹那もガジェットの増援に気付き。

A刹那「二人はここに残れ!増援は俺が叩く。」

刹那の提案になのは達は反対した。

なのは「刹那君!いくらなんでも無茶だよ」

フェイト「そうだよ、ここは三人で」

フェイトが言い切る前に刹那が言う。

A刹那「俺とガンダムならこの程度問題無い、二人はFW陳を見てやってくれ。」

やや強く刹那は言った。なのはとフェイトはそれ以上何も言えなかった。

なのは「わかった、でも気をつけてね。」

刹那「ああ、行くぞ！アストレア！」

刹那は最大スピードでガジェットに突入する。その途中で、相手と自分の戦力を確認する。

A刹那（敵はミサイルやビーム砲を中心の射撃型。こちらは接近戦が中心、ミサイルの迎撃はビームバルカンがある。ビーム砲も回避可能なら。）

A刹那「一気に接近して、殲滅する。O！」

O「了解！」

アストレアに四本の剣が装備される。

A刹那「アストレア、目標を駆逐する！」

先頭のガジェットを、GNソードで切断する。爆風で視界が悪くなった、煙りの中から右にGNソード、左にGNRブレイドとGNプロトソードを装備したアストレアが現れ、ガジェットを殲滅する。後ろのガジェットにプロトソードを畳んだまま突き刺す。ガジェットの攻撃を回避しながら、近付き、切断していく。

刹那「全機撃破完了か。」

程なくしてガジェットを殲滅した刹那は、辺りの索敵をしつつなのは達の元に戻った。

なのは「刹那君！そっちは大丈夫だった？」

刹那を見つけたなのはが近付いて来る。

刹那「ああ大丈夫だ、そっちも無事終わったようだな。」

なのは「うん、リインがトレインを止めて、レリックを運べば終わり。」

フェイト「刹那も疲れたでしょう、隊舎に戻ったらゆっくり休むといいよ。」

刹那「そうだな、！いやその前にまだやることがあるみたいだな。」

刹那がそう言うとなのは達も敵を発見する。

なのは「あれは…？」

フェイト「赤い…光？」

刹那「な！？」

驚いた刹那の顔を見たなのはは

なのは「どうしたの！刹那君？」

刹那「あの機体は！」

刹那が睨む先オレンジと黒の機体いる

なのは「刹那君あの機体を知っているの？」

刹那「スローネ」

なのは「え？」

刹那「ガンダムスローネ」

ガジェットを従え跳ぶ二体の機体、スローネアインとスローネツヴァイがそこにいた。

ＳＴＯＲＹ０５初出動（後書き）

いかがでしたか？感想や漢字の間違え等お待ちしております。

刹那視点で書いているからＦＷ陳が空気にフェイトも空気気味だし

……才能ないのかな……感想も少ないし。

後アンケートをとりたいと思います

サウンドステージ０１の内容を入れようかと考えてます。賛成、反対を感想板に書き込んで下さい。期間は一週間です。

とりあえず次回予告どうぞ

強襲するスローネ

苦戦をしいれられる中

アストレアの新たな力が

次回高速の翼、鉄壁の盾

刹那スローネを駆逐する。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6110i/

革新者、新たな戦い

2010年10月11日08時07分発行